

血糖値測定事業から見た薬局でのセルフメディケーション推進

○田中 裕士、藤政 仁美、竹原 美穂
安川 徹

タイハイ薬局メディカルモールしろいし店

【目的】2016年度診療報酬改定において、かかりつけ薬剤師包括指導料が新設され、また、いわゆる門前薬局の評価の見直しが行われるなど、地域に根差した薬局づくりが求められている。従来の外来業務に加え、在宅医療への積極的な参加や、OTC薬の販売、健康相談など求められる役割は多岐に渡る。そのような状況の中で、地域におけるセルフメディケーションの推進も薬局の重要な役割の1つと考え、検体測定室での血糖値測定の結果を振り返り、今後の薬局づくりに役立てることを目的とした。

【方法】2015年10月～12月の間に測定を行った100名の結果を対象とする。「検体測定室に関するガイドライン」に則り測定を実施した。測定機器はテルモ「メディセーフフィット」を使用し、利用者負担は無料で行った。

【結果】測定に参加したのは男性32名、女性68名、平均年齢43.7歳であった。血糖値の扱いとして、随時血糖(食後10時間未満)140mg/dl以上、または空腹時(食後10時間以上)100mg/dl以上を糖尿病型とした。測定した血糖値の平均値は随時血糖108.6mg/dl、空腹時血糖91mg/dlであり、7名が糖尿病型という結果を示した。

【考察】検体測定室の最大の目的として、利用者の健康意識を高め、早期発見・受診につなげることである。利用者年代別で見ると、スクリーニングのターゲット層である30～50台が44%を占め、自身の健康への関心を感じた。また、今回の測定では7名が糖尿病型にあたる随時血糖値を計測したが、その後のフォローにより、かかりつけ医療機関への受診など前向きな返答を得た。活動を続け、さらに利用者を増やしていくことで地域住民のセルフメディケーション推進に寄与すると考察できる。今後の課題として、測定項目の拡大やより大規模なアピールが挙げられる。

認知症患者における残薬確認

○笹野 寿基、古田麻衣子、今村 真利
篠田 正信、箆島 清史、江口 侑美
安川 徹、辻 宗一郎

タイハイ薬局メディカルモールおぎ店

【目的】我が国において認知症高齢者の数は2012年の時点で全国に約462万人と推定されており、団塊の世代が後期高齢者となる2025年には700万人を超えるといわれている。これは、65歳以上の高齢者のうち、5人に1人が認知症に罹患する計算となる。認知症患者は認知機能の低下により、服薬状況が悪化している可能性が高い。また、高齢者では様々な生理機能の低下によって、複数の診療科で薬を処方され服薬していることが多い。このような状況を適切に把握し、一元的な服薬管理を行うことを目的に、患者宅へ伺い、服薬管理状況・残薬を確認し、薬物治療の適正化を図る試みを行った。

【方法】2016年1～3月の間、抗認知症薬(ドネペジル塩酸塩、ガランタミン臭化水素酸塩、メマンチン塩酸塩)を服用中の患者26名(男性5人、女性21人、平均年齢83歳)を対象に、自宅へ訪問し残薬の確認や服用薬の一元管理を行う提案を行った。

【結果】自宅への訪問を行い、服薬管理状況・残薬の確認に至ったのは対象患者26名中1名であった。自宅には当薬局より調剤した抗認知症薬に加え、他薬局から調剤された薬もあり、服用時点ごとに残薬のばらつきがあった。残薬の差がある旨を医療機関へ報告し、一包化等の一元管理を患者へ提案した。

通院の際に患者の家族が同行し、家族へ服薬指導を行った例が23例であった。

【考察】今回の試みでは、実際に自宅で状況を確認できた例が少なかったが、服薬管理の状況を見ることができたのは一つの経験になった。患者家族への提案では、管理できているとの理由で断られることが多かったが、来局間隔等を考慮すると必ずしも管理できているとは言えない。提案時に感じた印象では、自宅への訪問が敬遠されていることや、遠慮があることがうかがえた。自宅への訪問のハードルは高いようだが、継続して服薬管理にも手助けを行う姿勢を見せること、残薬を持参してもらうよう呼び掛けることを続けていく必要がある。